所報

氷見市教育研究所
〒935-0016　氷見市本町４－９
（氷見市教育文化センター内）
TEL　0766-74-8220
FAX　0766-74-5520
E-mail　kyouikukenkyu@city.himi.lg.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.city.himi.toyama.jp/hp/menu000000500/hpg000000416.htm

回　り　道

－「ちりとてちん」から学ぶ－

氷見市教育研究所
所長　小林　隆文

ＮＨＫの連続テレビ小説に「ちりとてちん」という番組がある。この番組は、実におもしろい。

その一つの理由は、個性あふれる登場人物が出演し、毎回、腹の底から笑わせてくれるということである。

二つには、親や友達のことを本当に深く思いやる人々が登場し、その登場人物の気持ちに感動し涙する場面が多くあるということである。

三つには、草若師匠の言葉に含蓄があるということである。あるとき、主人公の若狭が癌を煩っている草若師匠に「師匠が亡くなる前に自分が死にたい」ということを伝えると、草若師匠は「順番や」と言葉を返した。その言葉を聞いたとき、私はある人の言葉を思い出した。Ａ氏がＢ氏に世の中で一番めでたいことは何かと尋ねると、Ｂ氏は「親死ぬ。子死ぬ。孫死ぬということだ」「年齢の順番に死ぬということが一番めでたいことだ」と答えたそうである。人が年齢順に亡くなることは滅多にないことである。私が１８歳のとき、私の兄は２４歳で亡くなっている。そのとき、親より長生きすることがなによりの親孝行だと感じた。我が子を亡くした親を見ているだけに、このＢ氏の話に納得することができた。

四つには、草若師匠は弟子一人一人の個性を見極めるとともに、１０年先を見越して、それぞれの弟子に相応しい落語のかたちを示唆している。落語家の師匠の仕事には、私達教員の仕事に通じるところがある。教室での一斉指導の際は全員に対して同じ教え方をするが、個別指導の際には、子供の個性や学習の理解度等に応じた教え方をすることに似ている。

五つには、草若師匠は解決の方法を教えるのではなく、回り道だと分かっていても、弟子には自分の思ったようにやらせてみて、進むべき道に自ら気づかせるようにしている。その際、大きな過ちを犯しそうになったら諭し、進むべき方向をじっくり考えさせている。回り道を大切にするという点で、草若師匠は釈迦に似たところがある。ある日、釈迦が物覚えの良くない周利槃特に「塵を払わん、垢を拭わん」と言いながら参道を箒で掃くように命じた。ところが、しばらく唱えているのだが、すぐに忘れてしまった。そこで、釈迦は、弟子に通行人の振りをして「塵を払わん、垢を拭わん」と言いながら、周利槃特の側を通るようにと命じた。そのお陰で言葉を忘れそうになると思いだし、唱えることができるようになった。そのうち、塵とは何か、垢とは何かと考えるようになり、煩悩について考えるようになったという話がある。「煩悩とは何か考えよ」と言わず、その人に応じた言い方や方策を講じている。言葉を唱えながら参道を掃かせることは回り道のように思われるが、煩悩について真剣に考えさせるための上手い方策となっている。

このテレビ番組から、人間としても、教員としても学ぶことが実に多かったように思う。

この番組は３月で終わるが、残り少ない放送を今後も楽しみにしている。

第17回 氷見市教育大会

《苅谷　剛彦 先生》

今年度の教育大会は、「『生きる力』を育てる学習指導－小・中学校の連携を通して－」をテーマとしました。

分科会での授業や協議、全体会での小・中連携報告及び学力向上研究員会の研究報告が、今後の各中学校区で行われる小・中学校の連携の一助となれば幸いです。

また、東京大学大学院教授・苅谷剛彦先生の講演は、教師としての心構えについて考えるよい機会になりました。

講演の感想から

教えるということ

西條中学校　大窪　裕子

社会の担い手として必要な力をすべての子どもに身に付けさせつつ、個性や意欲を尊重していこうとする現在の公教育が抱えるアンビバレンスの中で、大村はま先生の実践のあり方や言葉の一つ一つが、教えるとはどういうことなのかを私たちに問いかけているように思えました。子どもの学びを支える教師という仕事のもつ大きさを改めて考えさせられるよい機会となりました。

授業実践から

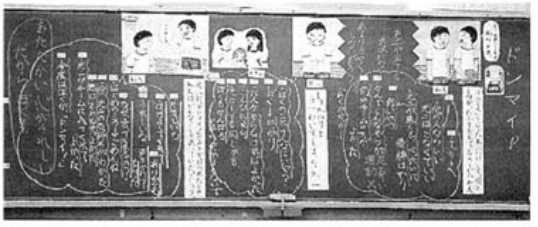
ロボコンとマルチメディアの融合

南部中学校　千場耕太郎

富山県中学校ロボットコンテストに参加する作品の発表の場として行ってきた校内ロボコン大会も４回目となった。ロボット製作の場面で創出したアイディアや大会参加への意気込みを映像を使ってプレゼンテーションし、相互評価する場面を授業として行った。ものづくり学習の集大成としてのロボコン学習と動画編集を含むマルチメディア作品制作との融合的なカリキュラムをいかに展開していくかが今後の課題であると感じている。

臨機応変の対応を目指して

宮田小学校　中舘　篤子



主題では、子供たちの実態を踏まえた自作資料・資料の主人公に共感できるような発問構成・より高い価値に気づくための板書の構造化を柱にして授業を行った。それにより、多くの子供たちは自分の内面を深く見つめることができたように思う。しかし、本授業を通して、臨機応変に対応し、子供たちの思いを十分に引き出すことの難しさを改めて感じた。これからも、自己研鑽に努め、子供たちと共に成長したい。

研究委員会報告

学力向上研究委員会

委員長　十三中学校　森下　哲也

今年度、４３年ぶりに小学校６年生と中学校３年生を対象に全国学力・学習状況調査」が実施されました。

本委員会では、この結果を各学校でどう活用できるのかという視点に立ち、校内研修会を開く際の資料作成に取り組みました。

問題の分析（PISA 型読解力の理解）、調査結果の分析方法及び授業改善の実践例等を提示しました。各校で、さらに工夫を加えていただければ幸いです。

校内研修用資料

学力の向上を目指して

学力向上研究委員会
氷見市教育研究所

学校評価システム研究委員会

委員長　窪小学校　粟原　紀子

氷見市学校評価システム構築事業の実践協力校の７校（小学校５校、中学校２校）が、今年度、学校評議員による外部評価とアクションプランの実践と評価に取り組みました。委員会を重ねる度に、各校の取組状況等が明確になり、取り組みの推進や改善上の参考となりました。

研究紀要では、各校の特色ある取り組みやアクションプランの実践状況、成果・課題をまとめました。

情報教育研究委員会

委員長　湖南小学校　田中　英雄

各校では教育活動や学校運営方針、自己評価等の公開に努めています。当委員会では「お助け隊」として、研修を兼ねてＨＰでの公開のお手伝いをしてきました。

信頼され開かれた学校づくりのため、今後ＨＰの役割が一層重要になります。多くの方にその学校のよさを知っていただくためにも、適宜更新され、より充実されることを願っています。

平成19年度　教育論文・教育実践記録の審査結果

	学校名	氏名	研究主題
一席	窪小	干場恵利華	思いや願いを生かし豊かに表現する子供を目指して －２年間の音楽教育を通して－
二席	朝日丘小	櫻井亜希子	命を大切にし、よりよく生きようとする子供を目指して －低学年における道徳教育を中心として－
	女良小	松尾あおい	自分の心と体に関心をもち、進んで健康な生活を実践していく子供の育成 －養護教諭からの積極的なかかわりを通して－
三席	久目小	山崎　里美	子供の心に響く道徳教育の展開を目指して －道徳的価値を深める総合単元的道徳学習の実践－
	仏生寺小	森田　智子	自然に親しみ、科学的に問題を解決する子供の育成を目指して －第５学年理科「天気の変化」「仏生寺川を流れる水のはたらき」の実践から－

新採教員の一年

出会いの中で

朝日丘小学校　大道　隆也

「出会い」は人を成長させてくれる。この１年間、明るく元気な子供たち、よき先輩方と出会えたことが特に心に残っている。日々の教育活動の中で、たくさんのことを学ぶことができた。

子供たちの柔軟な考え方、友達への何気ない気配り、進んでものごとに取り組む姿勢、子供たちとのふれあいの中で、数多くの発見があった。子供のことを最優先に考えておられる先輩方の姿は、よいお手本となった。

教員にとって大切なのは、学び続けようとする姿勢であると感じた。出会いの中で学んだことを生かし、精一杯教育活動に取り組んでいきたい。

クラスの木

朝日丘小学校　小栗　千佳

わたしの学級には「クラスの木」がある。互いのよさが目に見えるように、友達のがんばりやよさを木の葉に書いてつけている。

今では、子供たちのつけた木の葉でいっぱいになっている。「学習発表会きんちょうするけれど、がんばろうね」「困っていたときに、助けてくれてありがとう」など、友達への励ましや感謝の気持ちを伝える場になってきた。そんな子供たちの成長する姿を見て、一番エネルギーをもらっているのは、自分である。子供たちからもらったエネルギーを子供たちに還元するためにも、教師としての自分を磨いていきたい。

プラスの言葉かけを

明和小学校　本保　絵理

この一年間、子供の姿を通して私自身学ぶことがとても多かった。

ある日、「今、病気の人が保健室にいるから入らないでね。」と話しても言うことを聞かず、保健室でふざけて騒ぐ子供がいた。どんなに説明をしても反応が同じであったが、「具合の悪い人がいないときは、また来ていいよ。」と言い換えると、途端に笑顔で教室に戻るということがあった。当たり前のことだが、子供は否定する言葉ではなく肯定する言葉を求めているのだと、この時改めて実感した。子供たちが、自分が認められていると感じ、安心できるような声かけをしていきたい。

心の対話を通して

比美乃江小学校　高田　智子

着任以来、私は目の前にいる子供たちとの距離を、１日も早く縮めたいと願ってきた。子供同士のもめ事が起こった時は、子供がなぜそのような行動をとったのか、どのような気持ちでいたのか、背景にどんな問題があったのかを知ろうと、双方からじっくりと話を聞くように心がけた。そうすることで、徐々に子供との距離は近づき、教室全体が落ち着いた雰囲気になっていった。教師が受け止めてくれるという安心感で、子供は驚くほどの変容を遂げた。これからも自分の一言一言に責任を持ち、子供の無限の可能性を伸ばす教師を目指していきたい。

努力を続ける教師

比美乃江小学校　河上　朋子

２９人の子供たちと共に４月、教師としてのスタートを切った。私は日々、子供たちの成長に大きな喜びと教師という仕事のやりがいを感じている。給食を残さず食べられるようになった子供、自ら手を挙げて発表できるようになった子供、友達が困っていたら手助けをしてあげる子供、汗を流しながら隅々まで雑巾がけをする子供。子供たちは仲間とかかわりあいながら日々成長している。私自身もその子供たちの姿から多くのことを教わった。今後も、一人一人の笑顔があふれる学級を目指し、子供と共に学び、努力を続ける教師でありたい。